

日本語の学習環境と 日本的習慣を表現した熟語の知識との関係*

広島大学 玉岡 賀津雄**

研究の目的

言語の習得は、同時にその言語を母語とする人々の価値観や規範の学習を含んでいるとよく言われる。それは、言語が、社会・文化的な意味内容を概念化するのを支えているからであろう。例えば、アメリカから来日した留学生が、日本には、中間管理職でありながら実際にはやる仕事がなく、かといって終身雇用制ゆえに解雇されもしない人達がいることに気づいたとしよう。この段階ではまだ曖昧な理解であろうが、ひとたび「窓際族」という表現に出会い、窓際に机を与えられて定年を待つ人々のことだと分かれば、この語彙を媒介として、社会・文化的な意味内容がより鮮明に理解できるのではなかろうか。つまり、異文化状況で経験した社会・文化的な習慣を曖昧な理解から鮮明で固定化した概念へと導く媒介の役割を、これらの熟語が担っていることになる。そう考えると、日本の社会・文化的な習慣を表現した熟語の習得は、日本語の理解ばかりでなく、日本文化の理解にとっても重要であると言えよう。

例えば、角田(1992)や石井・岡部・久米(1992)は、エスキモーの持つ多様な雪の表現(宮岡, 1978)など、他の社会・文化と異なる対象を表現した語彙については、言語的な特殊性を認めている。また、Kess(1992)も、英語の‘brother’は、日本語では年齢で区別して「兄」

と「弟」で表現することなどを挙げている。さらに、多様なアルファベット系言語からの語彙の借用が、ついに30,000語以上を掲載する日本語の外来語辞典を作り上げるにいたったことに言及して、「語彙は文化の接触を反映する大切な鏡である」(Hoffer, 1994, p. 7)と述べている。このように、社会・文化的な意味内容を持つ語彙や熟語は、その社会・文化的内容を反映している。従って、こうした熟語の習得は、社会・文化的な理解を促進するよう機能すると想定される。

また、ユーモアの理解では、言語能力ばかりでなく、その言語が使用される社会・文化的な知識の影響(星野, 1992; 石井・岡部・久米, 1992)が考えられる。第2言語として英語を専門に学ぶ日本人大学生の場合、単語が正しいかどうかの語彙正誤判断(lexical decision)課題に対する英単語の印刷使用頻度(特定の単語が印刷物にどのくらいの頻度で使用されているかを示した数値)の影響が観察されても、それが彼等の英語能力の高低とは関係しない(Tamaoka & Takahashi, 1992)という報告がある。しかし、同研究(Tamaoka & Takahashi, 1994)によると、ユーモアを含む表現の翻訳では英語能力で分けられた高・中・低の三つのレベル間に差はないものの、そのユーモアの内容理解では、英語能力の低いグループが、高・中の両グループと比べて有意に低い点数を示した。これは、英語の翻訳という言語的な能力では、ユーモアの理解は難しく、社会・文化的な知識をもなうことで、英語で書かれたユーモアが日本人に理解しえたのではないと思われる。

* The relationship between international students' Japanese learning environment and their knowledge of special cultural expressions.

**TAMAOKA, Katsuo (Hiroshima University)

堀江 (1995) もまた, ‘マイペンライ’ というタイ語の表現が, 日本語では ‘気にしない’ とか ‘構わない’ と解釈されて, 日本人に不快感を与える傾向があることを記している。しかし実際には, ‘マイペンライ’ は, ‘どういたしまして’ とか ‘ご心配なく’ といった意味を持ち, 「やさしくしかも美しい言葉」(堀江, 1995, p. 1) である。このような誤解されやすい表現は, 社会・文化的な経験を通してはじめて正確に習得される概念ではなからうか。

以上のように, 学習の目標となっている言語に関する社会・文化的な知識が豊かである方が, その言語で書かれた文章の理解度が高いようである。その意味で, 学習目標となっている言語の基礎学習が終わった段階では, 社会・文化的な内容を豊富に含んだ教材を使用して, 言語そのものとその社会・文化的な内容の双方から学習を促す「コンテキスト・アプローチ」(context approach) が重要となつてこよう (Tamaoka & Takahashi, 1994)。

そこで, 本研究は, 日本の社会・文化的な習慣を表現した熟語の認知テスト (以下, 「日本文化熟語認知テスト」とよぶ) を作成し, 日本語を外国語として学習する

学生の実環境および背景要因との関係を考察することによって, これらの語彙を習得するための最適な教育的条件を模索する。

調査

被験者: 留学生80名 (女性43名, 男性36名, 無記入1名) および妥当性を検討するための基準として日本語を母語とする日本人大学生135名 (女性93名, 男性42名) を調査の対象とした。留学生の年齢は, 20歳から44歳までで, 74パーセントが20代である。また, 出身国は, 中国が34名で42.5パーセントを占め, 次に韓国16名, 台湾10名で, 残りは14カ国からの留学生であった。さらに, 未婚者が70パーセント以上を占めており, 家族・親戚と日本に住んでいる留学生はわずかに20パーセント以下であった。大学での学籍は, 学部生40名, 大学院生26名, 研究生14名である。日本人大学生は, 全員が学部生で, 19歳から25歳までの年齢である。

刺激項目: 「以心伝心」「根回し」など日本の社会・文化的な習慣を表現した20種類の熟語を『日・本・人・語』および『続日・本・人・語』(三菱商事広報部, 1988&

表1 χ^2 検定による留学生 (n=80) と日本人大学生 (n=135) の日本文化慣用表現テストの正答率比較

慣用表現	留学生		日本人大学生		χ^2 検定・有意差	擬似語	留学生		日本人大学生		χ^2 検定・有意差
	正答者数	率	正答者数	率			正答者数	率	正答者数	率	
気配り	68人	85.0%	129人	95.6%	**	帽子をかざす	78人	97.5%	130人	96.3%	
年功序列	66人	82.5%	129人	95.6%	***	即答小得	77人	96.2%	135人	100.0%	***
お中元	66人	82.5%	129人	95.6%	***	赤幕	76人	95.0%	132人	97.8%	
本音と建前	64人	80.0%	128人	94.8%	***	花を預ける	71人	88.7%	133人	98.5%	**
以心伝心	60人	75.0%	129人	95.6%	***	耳をくくる	69人	86.2%	134人	99.3%	*
水に流す	59人	73.7%	132人	97.8%	***	口にためる	69人	86.2%	129人	95.6%	*
みずくさい	59人	73.7%	135人	95.6%	***	足回し	68人	85.0%	131人	97.0%	*
ごまをする	52人	65.0%	131人	97.0%	***	気をさます	68人	85.0%	129人	95.6%	**
義理がたい	46人	57.5%	125人	92.6%	***	こぶ巻き	68人	85.0%	108人	80.0%	
顔をたてる	45人	56.2%	126人	93.3%	***	一目読心	66人	82.5%	128人	94.8%	**
後ろ指をさされる	41人	51.2%	116人	85.9%	***	沈黙招幸	66人	82.5%	134人	99.3%	***
天回り	39人	48.7%	86人	63.7%	*	腹眼術	65人	81.2%	130人	96.3%	***
根回し	38人	47.5%	115人	85.2%	***	友好賛美	65人	81.2%	128人	94.8%	**
恩にきせる	37人	46.2%	117人	86.7%	***	辞令交換	62人	77.5%	120人	88.9%	*
減私奉公	36人	45.0%	30人	22.2%	***	さるすべり	61人	76.2%	97人	71.9%	
お茶をにごす	35人	43.7%	123人	91.1%	***	都志向	60人	75.0%	119人	88.1%	
村八分	30人	37.5%	127人	94.1%	***	背後の礼	59人	73.7%	127人	94.1%	***
腹芸	22人	27.5%	51人	37.8%		あごを引く	56人	70.0%	99人	73.3%	
親方日の丸	21人	26.3%	22人	16.3%		親の影を踏む	54人	67.5%	119人	88.1%	***
ぬけがけ	10人	12.5%	123人	91.1%	***	胸を割って話す	45人	56.2%	92人	68.1%	***

注: * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

1992) から選んだ。選択の基準としては、比較的良好に使われ、なおかつほとんどの日本人がよく知っていると思われる項目とした。さらに、擬似表現として「沈黙招幸」「足回し」など、さも日本の社会・文化的な習慣を表現したと思われるような熟語を同数の20語作った。具体的な熟語および擬似表現は表1に示した通りである。

手続き：日本の社会・文化的な習慣を表現した熟語を配列した問題用紙を、留学生および日本人大学生に配布した。そして、それぞれの熟語が、日本語に存在する語彙であるかを尋ね、そうであれば○を付けるように指示した。この際、日本語に存在する熟語のみで問題を作成した場合は、全部に○を付けると全問正答になってしまい、適切な測定ができなくなる恐れがある。そこで、日本語に存在する20種類の熟語と同数の20種類の擬似語をランダムに配置した。そして、日本語で正しい表現の熟語である正答数を擬似語の誤答数から引いて文化理解の得点とした。従って、得点は、最高が+20点で、最低が-20点となる。

クローズ・テストによる日本語能力の測定：日本語能力を測定するために、秦(1987, 1990)が先行研究で使ったクローズ・テストを2種類採用した。クローズ・テストとは、文章の一部を抜いて、そこに適切な単語や表現を入れる問題である。文章は、テストAがJapanese for Todayの第17課の「日本人」から、テストBが山口瞳の「江分利満氏の優雅な生活」(文芸春秋)から取ったものである。本研究では、漢字の入る部分は□で、ひらがなの部分は○で示した形式の問題を使った。本研究で使用した2種類のクローズ・テスト(AとB)と日本語検定実施のための試行試験(1-2級レベル)の総合得点との相関は、A($r=0.66, p<.001$)もB($r=0.64, p<.001$)も、いずれも高く、有意であったことが報告されている(秦, 1990; $n=20$)。また、本研究に使用したクローズ・テストではないが、ドイツ語圏で日本語を学習している大学生($n=49$)を対象に行われた同種のテストを使った調査(Roos, 1994)でも、日本語能力試験4級から1級までの試験結果と比べたところ、2級(r

$=0.89, p<.001$)との相関がとりわけ高く、1級($r=0.47, p<.05$)とも高い相関が見られた。しかし、3級および4級とRoosの使用したクローズ・テストの間には高い相関は見られなかった。従って、クローズ・テストは、日本語能力試験2級以上に達した日本語学習者の日本語の読み能力を測定するのに有効なように思われる。本研究に参加した留学生はすでに日本の大学に入学しており、日本語能力試験で少なくとも2級以上のレベルであると思われるので、クローズ・テスト(以下、「日本語能力テスト」と呼ぶ)で総合的な日本語能力が測定できると考え、日本語能力を測定する尺度として用いた。

結果

(1) 日本文化熟語認知テストの信頼性

日本文化熟語認知テストの得点は、日本語として正しい表現の熟語の正答数($M=11.18, SD=4.69$)から擬似語の誤答数($M=3.71, SD=3.01$)を引いて($M=7.46, SD=4.25$)算出した。このテストの信頼性は、クロンバックの α 係数によって測定した。その結果、留学生について、日本語に存在する熟語は $\alpha=0.85$ で、擬似語は $\alpha=0.72$ であった。また、日本人大学生については、正しい熟語が $\alpha=0.75$ で、擬似語が $\alpha=0.69$ であった。日本人大学生は、正しい熟語20項目の内、13項目が90パーセント以上の正答率になっており、天井効果が現れ、その結果、テスト自体の信頼度係数は留学生に比べて低かったのであろう。いずれにしても、日本文化熟語認知テストは、日本語を外国語として学ぶ人々を測定対象としているため、留学生の信頼度係数から推定して、十分信頼度の高いテストであるといえよう。

(2) 留学生の属性と日本文化熟語認知テスト

留学生の属性を知るために、年齢や性別などを尋ねた。そして、日本文化熟語認知テストおよび日本語能力テスト($M=40.13, SD=8.98$)の得点について、留学生の属性による分散分析およびt検定を行った。その結果、年齢、性別、日本人の知人の有無、既婚か独身か、日本の大学での学籍(学部生、大学院生、研究生)、一人暮

らしかどうか、海外での日本人との接触頻度、といった留学生の属性は、日本文化熟語認知テストおよび日本語能力テストの結果に影響しなかった。

(3) 海外および日本での日本語学習期間と日本文化熟語認知テスト

留学生の海外および日本での日本語学習期間と日本文化熟語認知テストおよび日本語能力テストの関係を検討すると、海外での日本語学習期間 ($M=1$ 年10カ月, $SD=2$ 年9カ月) と日本語能力テストの得点との相関は高く、有意である ($r=0.40$, $p<.001$) にもかかわらず、日本文化熟語認知テストとの相関は低かった ($r=0.12$, $p<.30$)。一方、日本での日本語学習期間 ($M=3$ 年0カ月, $SD=2$ 年1カ月) は、逆に日本文化熟語認知テストとの相関は高く、有意であり ($r=0.31$, $p<.01$)、日本語能力テストとの相関は低かった ($r=0.16$, $p<.15$)。これは、海外での日本語学習が日本語能力を向上させるのに役だっているのに対し、いったん日本に来てからの日本語学習は、日本の社会・文化的な習慣を表現した様々な熟語の習得を促進していることを示すものであろう。要約すると、海外では一般的な日本語学習が促進され、また、日本では社会・文化的意味内容を持つ熟語などの学習が促進されるようである。

(4) 日本文化熟語認知テストと日本語能力テストに及ぼすメディア接触

日本文化の理解および日本語能力には、媒体となるメディアからの影響が考えられる。そこで、メディアを(1)新聞、本/雑誌、漫画の文字メディア、(2)テレビ、ラジオ、映画/ビデオの視聴覚メディア、(3)日本人の友人関係、ボランティア、アルバイトの対人メディアの3種類の領域で、日本文化熟語認知テストと日本語能力テストへの影響を分析した。

まず、文字メディアとの接触においては、新聞を読む頻度について、「いつも読む」(M_1 グループ, $n=27$) とそれ以外の「ときどき読む」から「全く読まない」(M_2 グループ, $n=53$) の二つのグループに分け、日本文化熟語認知テストと日本語能力テストの得点について t 検

定を行った。その結果、日本語能力テスト ($M_1=40.41$, $M_2=40.00$) に関しては有意な差が見られなかったが、日本文化熟語認知テスト ($M_1=8.78$, $M_2=6.80$) に関しては有意な差が見られた [$t(78)=2.01$, $p<.05$]。次いで、本/雑誌を読む頻度について「いつも読む」(M_1 グループ, $n=31$) とそれ以外の「ときどき読む」から「全く読まない」(M_2 グループ, $n=49$) の二つのグループについても同様に t 検定を行った。その結果、やはり日本語能力テスト ($M_1=41.97$, $M_2=38.98$) には有意な差がないにもかかわらず、日本文化熟語認知テスト ($M_1=8.97$, $M_2=6.51$) には有意な差が見られた [$t(78)=2.61$, $p<.01$]。しかし、同じ文字メディアであっても、多少の映像を含む「漫画」を読む頻度によって、日本語能力テストにも日本文化熟語認知テストにも有意な得点差は見られなかった。

次に、視聴覚メディアとの接触については、テレビ、ラジオ、映画・ビデオのそれぞれの視聴頻度別に t 検定を行ったが、日本文化熟語認知テストまたは日本語能力テストの得点に有意な差は認められなかった。これは、視聴覚を媒介とした言語活動を頻繁に行っても、文字を介した日本語の「読み」活動と関わりの深い日本文化熟語認知テストや日本語能力テストの得点の向上に貢献しないことを示しているのであろう。

さらに、対人メディアとの接触については、日本人の親しい友人の有無とアルバイトの延べ期間は、日本語能力および日本文化熟語認知に影響がなかった。ところが、ボランティアの参加頻度における「ときどき参加する」と「よく参加する」(M_1 グループ, $n=27$)、および「全く参加しない」と「あまり参加しない」(M_2 グループ, $n=53$) の二つのグループ間には日本語能力テストの得点には有意な差がないのに、日本文化熟語認知テストの得点 ($M_1=9.00$, $M_2=6.68$) には有意な差がみられた [$t(39.9)=2.13$, $p<.05$]。つまり、「話す」言語活動を伴う対人関係は、「読み」能力で測定した日本語能力の向上には貢献しないものの、ボランティアによる社会的活動への積極的な参加は、社会・文化的な習慣を表現

した熟語の認知を促進するようである。経験から生じる社会・文化的理解が、それらを表現した熟語の理解へと結びついているのかも知れない。

(5) 日本語能力および日本語での会話頻度と日本文化熟語認知テスト

2種類のクローズ・テストで測定した日本語能力テストと日本文化熟語認知テストの相関をみると、テストA ($r=0.39, p<.001$), テストB ($r=0.39, p<.001$), また両方を加算した点数 ($r=0.43, p<.0001$) の、いずれの場合も高い相関を示しており、日本語能力と日本の社会・文化的な習慣を表現した熟語の理解とが深い関わりを持っていることを示している。また、「現在、日本の生活の中でいろいろな人とあなたが会話するとき、どのくらい日本語を使っていますか」という質問を行い、日本人と話すときの日本語使用率が80%以上と以下の二つのグループに分けてt検定を行った。その結果、日本文化熟語認知テストおよび日本語能力テストの得点に有意な差はなかった。いずれのテストも、「読み」による日本語能力および日本文化理解を測定しており、「話す」「聞く」という口頭での日本語使用は、それら二つのテストで測定された能力を向上させるのには貢献していないようである。

(6) 日本文化熟語の項目ごとの正答率

表1に示した日本文化熟語認知テストの項目ごとの正答率から分かるように、正しい熟語の内、留学生が30パーセント以下の正答率を示したのは、「ぬけがけ」、「親方日の丸」および「腹芸」の3項目であった。これは、日頃、留学生がどのくらいこれらの熟語に触れる機会があるかを示した使用頻度と関係がありそうである。つまり、熟語の使用頻度が低くなる程、正答率が低くなると思われる。また、擬似語では「胸を割って話す」、「親の影を踏む」および「あごを引く」の3項目において、30パーセント以上の留学生が誤って正しい熟語であると答えた。しかし、それ以外の誤りは、30パーセント以下に留まった。平均の正答率をみると擬似語 ($M=81.38\%$)の方が正しい熟語 ($M=55.86\%$)よりも、よ

り高い正答率を示した。

クローズ・テストの場合は、テストが成立する条件として、問題に使われている言語を母語とする母集団が95パーセント以上の正答率を示していることが挙げられている (Grotjahn, 1987)。もちろん、母語話者の言語能力の問題が残されるが、本研究の熟語認知であれば、抽象性の高い比喩的表現を含む熟語であるため、本研究に参加した日本人大学生の85パーセント以上が、正しい熟語であると判断していることを、適切な熟語項目の基準とした。この基準で、各項目の妥当性を考えると、「天下り」、「減私奉公」、「腹芸」および「親方日の丸」の4つの項目については正答率が低いため、他の熟語と入れ換える必要があろう。これらの熟語は、現在では、19歳から25歳の日本人大学生にはあまり使用されなくなっていると思われる。これは、留学生と日本人大学生との正答率を χ^2 検定で比較してみると、表1に*印で示したように、正しい熟語である「腹芸」と「親方日の丸」以外のすべての項目で、正答率に有意な差が見られたことから裏付けられる。やはり、「腹芸」や「親方日の丸」は、最近あまり使われなくなっているため、留学生ばかりでなく日本人大学生でも正答率が低く、両グループに差が見られなかったのであろう。

(7) 熟語項目全体でみた場合の認知傾向

本研究で挙げた熟語の中にも、異なった理解パターンを示す熟語が存在するかもしれない。そこで、留学生における日本語に存在する20種類の熟語の解答を、林の数量化理論第Ⅲ類 (安田, 1977) で分析した。析出された次元を解釈すると、日本の社会・文化的な習慣を表した熟語の認知には、「心理的なコンテクスト」(1X_1)と「社会的なコンテクスト」(2X_1)の二つの次元が考えられる。前者 (${}^1X_1; \rho=0.526, \rho^2=0.277$) は、個人の配慮や内的な描写など心理的な側面を表現した次元であり、後者 (${}^2X_1; \rho=0.283, \rho^2=0.080$) は、他者との駆け引きやグループからの疎外など社会的な側面を表現した次元と解釈された (図1を参照)。具体的には、一つの次元は、「後ろ指をさされる」($-0.943, -0.617$)、「ごま

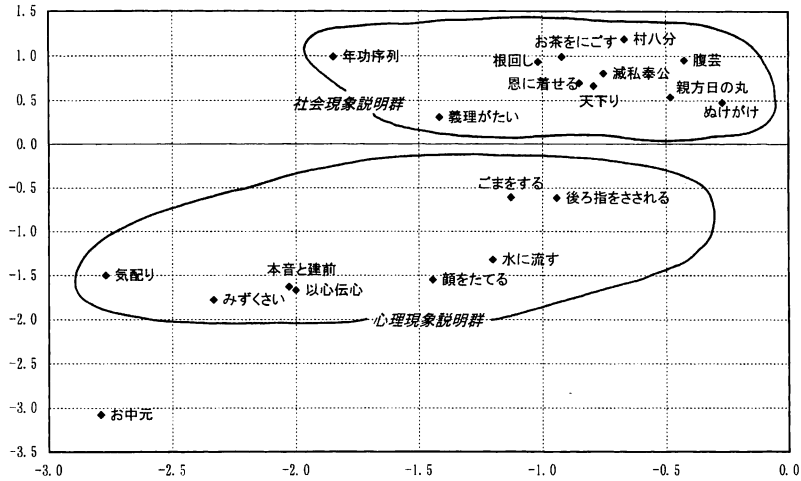


図1 数量化理論第Ⅲ類による熟語項目のプロット

をする」(-1.127, -0.609), 「顔をたてる」(-1.444, -1.548), 「水に流す」(-1.200, -1.320), 「本音と建前」(-2.029, -1.628), 「気配り」(-2.769, -1.500), 「以心伝心」(-2.001, -1.668), 「みずくさい」(-2.333, -1.778) の8熟語からなる「心理現象説明群」となる。もう一つの次元は, 「年功序列」(-1.848, 1.596), 「村八分」(-0.669, 1.191), 「腹芸」(-0.425, 0.955), 「お茶をにごす」(-0.922, 0.993), 「減私奉公」(-0.754, 0.807), 「恩に着せる」(-0.852, 0.696), 「天下り」(-0.794, 0.666), 「親方日の丸」(-0.482, 0.537), 「ぬけがけ」(-0.271, 0.476), 「根回し」(-1.017, 0.935), 「義理がたい」(-1.416, 0.309) の11熟語からなる「社会現象説明群」となる。ただ, 「お中元」(-2.789, -3.076) は, いずれの分類にも入らないようである。

これら2つの熟語群別に総合得点を求めて, 海外と日本での日本語学習期間および日本語能力テストとの相関を検討した。「社会現象説明群」($M=4.75$, $SD=2.80$) は, 日本語能力と高い相関 ($r=0.40$, $p<.001$) があり, 有意であった。さらに, 海外 ($r=0.22$, $p<.05$) と日本 ($r=0.29$, $p<.01$) での日本語学習期間に低いながらもある程度の相関がみられ, これも有意であった。ま

た, 「心理現象説明群」($M=6.43$, $SD=2.47$) は, 日本語能力 ($r=0.40$, $p<.001$) および日本での日本語学習期間 ($r=0.48$, $p<.0001$) に高い相関がみられ, これもまた有意であった。このように, 両熟語群の認知の程度は, 日本語能力に関係している。ただし, 「心理現象説明群」の熟語認知は, 海外での日本語学習期間とは関係なく, 日本での日本語学習期間と関係があった。

考察

本研究は, 日本の社会・文化的な習慣を表現した熟語の習得が, 同時に日本の社会・文化的な特徴を理解するのを促進する役割を果たすことを考察した。まず, 本研究は, 日本文化熟語認知テストを作成し, 日本語の学習環境要因との関係から, どのような要因がこれらの熟語の習得を促進しているかを検討した。

まず第1に, 日本語学習期間を海外と日本に分けて, 日本文化熟語認知テストとの関係を検討した。クロス・テストで測定した日本語能力テストには海外での日本語学習期間と相関が認められた。一方, 日本文化熟語認知テストの場合は, 日本での日本語学習期間との相関を示した。これは, 海外での日本語学習が日本語能力を培うのに大きく貢献していると思われる。一方, 日本で

の日本語学習は日本的な意味内容を含む語彙の習得に有利であると考えられる。やはり、生活を通して実際に得られる日本での異文化体験を、より鮮明に概念化することによって、日本の社会・文化的な習慣を表す語彙の習得が進むと推測される。それならば、日本語教育の場においても、留学生の日本での生活体験と結びつけて日本語学習を展開するような教授法および授業内容を工夫することによって、これらの熟語もより効率よく習得されるのではなかろうか。

さらに第2に、文字、視聴覚および対人の3種類のメディアが日本文化の理解を促進しているのではないかとと思われる点について検討した。その結果、新聞や本/雑誌の読書頻度で示された文字メディアへの接触と、ボランティア活動への参加頻度のような対人メディアへの接触が日本文化熟語の認知と関連していることが分かった。日本での日本語学習期間との関係が強かったことも考慮すると、日本での生活体験における社会・文化的な意味を豊富に含んだ文字や対人メディアとの接触によって、文化理解が深められているのではないかとと思われる。その過程で、例えば本研究で示したような熟語は、日本の社会・文化的な習慣を鮮明に概念化するのを助けているのではなかろうか。逆に、文字メディアおよびボランティアなど社会活動への積極的な参加は、多様な社会・文化的な意味内容を表現した熟語の理解を促進していると解せるので、留学生にこれらのメディアへの接触を強く奨励すべきであろう。

第3に、日本語能力や日本語での会話頻度との関係を考察した。日本文化熟語認知テストと日本語能力テストと会話頻度の相関はかなり高いと思われたのだが、日本語での会話頻度で分けたグループ間には日本文化熟語認知テストおよび日本語能力テストの得点に有意な差は認められなかった。実際、おしゃべりの好きな留学生なのに漢字が全然書けないとか、文章はよく読めても会話は苦手といったように、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4種類の言語技能が必ずしも均等に発達するのではない(Leton, 1996)と思われるような言語行動が日常的にも

よく観察される。本研究では、書かれた文字による「読み」レベルの言語能力および熟語認知を測定したため、「話す」「聞く」といった口頭言語の側面を反映した現象との関係が希薄だったのではなかろうか。留学生の日本語能力を判断する際に、これら4種類の言語能力が個別に独立して習得されうることを念頭において、「話す」のが流暢だから日本語ができる、また逆に書かれた文章の「読み」に優れているので日本語ができる、といったように一側面のみで日本語能力を判断しないよう注意すべきであろう。

第4に、本研究で利用した熟語の正答率を項目ごとに検討した。その結果、留学生ばかりか日本人大学生でも、正答率の低い項目があった。「腹芸」や「親方日の丸」などは、日本語に存在する熟語ではあるが、あまり使われなくなったためか、日本人大学生でも正答率が低かった。本研究で使用した熟語の正答率は、社会や文化の変化が言語使用の変化を誘発する現象を反映しているのではなかろうか。

第5に、正しい熟語全体での認知パターンを正答率から考察した。その結果、「年功序列」とか「村八分」のように社会的な習慣を表現した熟語群と、「気配り」とか「顔をたてる」のように心理的な習慣を表現した熟語群に分かれることが確認できた。さらに、この分類ごとの合計得点を計算して日本語能力テストと海外および日本での日本語学習期間との関係を調べた。すると、両熟語群とも日本語能力テストとの関係が強いものの、社会・文化的な習慣を表現した熟語の認知は海外と日本の両日本語学習期間に関して弱い有意な相関が見られ、心理的な習慣を表現した熟語については、日本での日本語学習期間と高い相関が認められた。社会的な意味内容をもつ熟語は海外でも学習できるものの、個人的なレベルの心理的な意味内容をもつ熟語の場合は、日本での異文化体験を通して学習が促進されるようである。実際、日本で生活することから生じる「文化的衝撃」(cultural shock)は、特に心理的な側面への影響が強いことが指摘されている。こうした留学生の体験が日本の心理的な

習慣を表現した熟語の理解を促進している可能性がある。それなら、留学生の体験を日本の多様な社会・文化的な熟語と関連させながら教えるような教授法や授業内容がより効果をもつと思われる。

本研究では、こうした熟語の持つ意味的な制約については議論しなかった。しかし、日本的な習慣を表現した熟語を学習することによって、その熟語の意味内容から固定化した概念が形成されるという側面のあることを最後に指摘しておきたい。これは、マンネリ化した日本人の社会・文化的なイメージを留学生に植え付けてしまう可能性を残している。例えば、「本音と建前」という熟語を学習したとすれば、日本人は「建前」ばかりで話をして「本音」を出さないと理解し、日本人との親密な人間関係の形成に支障をきたすことにもなろう。したがって、日本人にも多様な人々がいて、熟語で示されたような「典型的」と考えられている行動様式や習慣が常に当てはまるわけではないことを、加えて教えるよう注意すべきであろう。

注

本研究は、江淵一公先生（元九州大学教授、元異文化間教育学会会長）を代表とする国際文化フォーラムの委任研究プロジェクトとして、1993年から1995年までの間に実施した調査の一部である。

引用文献

GROTJAHN, R. (1987). How to construct and evaluate a C-Test. A discussion of some problems and some statistical analyses. In R. Grotjahn, C. Klein-Braley & D.K. Stevenson (Eds.), *Taking their measure: The validity and validation of language test* (pp. 219-255), Bochum: Brockmeyer.

星野命 (1992). クロス・カルチャア思考への招待—異文化間体験の心. 読売新聞社.

HOFFER, B.L. ・橋本弘子訳 (1994). ことばと文化—人々から生まれて人々をつなぐ. 本名信行・秋山高

二・竹下祐子・ベイツ・ホッフア (編) 異文化理解とコミュニケーション 1 (pp. 6-28), 三修社.

堀江・インカピロム・ブリヤー (1995). 日本語と外国語との対象研究Ⅱ マイペンライ. 国立国語研究所.

石井敏・岡部朗一・久米昭元 (1992). 異文化コミュニケーション—新国際人への条件 (第12版). 有斐閣.

KESS, J.F. (1992). *Psycholinguistics: Psychology, Linguistics and the Study of Natural Language*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

ROOS, U. (1994). The C-test in Japanese. In R. Grotjahn (Ed.), *Der C-Test: Theoretische Grundlagen und praktische Anwendungen* (pp. 61-113), Bochum: Brockmeyer.

LETON, D.A. 著, 玉岡賀津雄訳 (1996). 読みの発達における条件づけ・理解・記憶. 読書科学, 40, 26-35.

三菱商事広報部 (1988). 日・本・人・語. 東洋経済新報社.

三菱商事広報部 (1992). 続 日・本・人・語. 東洋経済新報社.

宮岡伯人 (1978). エスキモーの言語と文化. 弘文堂.

秦喜美恵 (1987). 日本語能力評価のための一考察—クローズ・テストの信頼性, 妥当性, および採点法の問題. 言語文化論集 (名古屋大学総合言語センター), 8(2), 229-246.

秦喜美恵 (1990). 日本語クローズ・テストから日本語変形C-Testへ—採点法の問題を中心に. 言語文化論集 (名古屋大学総合言語センター). 11(2), 213-225.

TAMAOKA, K., & TAKAHASHI, T. (1992). Can efficiency of English word decoding be a good predictor of English ability for Japanese students? *Annual Review of English Language Education in Japan*, 3, 43-52.

TAMAOKA, K., & TAKAHASHI, T. (1994). Understanding humour from another culture: Comprehension of parental brain twisters by Japanese university students learning English as a second language. *Psychologia*, 37,

150-157.

き. 日本語学, 11, 12-24.

角田太作 (1992). 日本語と日本文化についての覚え書

安田三郎 (1977). 社会統計学. 丸善.

SUMMARY

This study investigates the degree of foreigners' acquisition of Japanese socio-cultural expressions by way of their recognition of expressions pertaining to Japanese customs. Eighty international students were given a lexical decision task where they were asked to distinguish between 20 existing expressions relating to Japanese customs and 20 pseudo-expressions. The ratio of correct responses was in direct correlation with the length of time one had spent learning Japanese in Japan rather than abroad. The frequency of *reading* newspapers, books and magazines pertaining to Japan and how often one participated in activities with other Japanese affected the ratio of correct

responses: whereas the frequency of conversing in Japanese with others had no effect on one's understanding of the expressions related to Japanese customs. All 20 expressions in the lexical decision task were deemed as having either a social or a psychological context according to Hayashi's Type III Classification Analysis. The findings of this study show that knowledge of expressions with a social context has a weak correlation to the time spent learning Japanese in Japan or overseas; however, knowledge of expressions having a psychological context is highly indicative of the length of time spent learning Japanese in Japan only.